

トルコ共和国の高等学校用歴史教科書第 1 巻 4 章「イスラム史と文明(13 世紀まで)」、訳・寺尾陽啓

第 4 章 イスラム史と文明 (13 世紀まで)

研究課題

- イスラムの誕生期における世界の基本的状況
- イスラムの誕生期におけるアラブ人たちの宗教と信仰
- イスラム以前のトルコ人たちの宗教と信仰
- 無学時代におけるアラブ人たちの社会と経済状況
- 聖ウマル時代の政府組織によってなされた改革
- イスラム文明の組織における他の文明の影響
- イスラム政府における文書、言語と文芸
- イスラム文明の基礎

A. イスラムの誕生期における世界の基本的状況

アジア

a) 政治状況

イスラムの誕生期において、アジア、ヨーロッパとアフリカ大陸、は古い世界だと捉えられていた。その時期アジアにおいて明確な権力を持っていた政府といえば、ビザンツ帝国、ササン朝ペルシャ、ギョクトウルク、中国、インド、そして日本である。

ビザンツ帝国

イスラムの誕生期において、すぐ東にあった政府の一つがビザンツ帝国だった。ローマ帝国が二分されてから (395 年) 東ローマ帝国 (ビザンツ帝国) という名前で始まった東側の国で、ヨーロッパにも領土はあったが「東側の政府」として繁栄した。5 世紀に「民族大移動」の結果、西ローマは崩壊した。(476 年)

東ローマ帝国は、バルカン半島においてアヴァール人と彼らに関係のあるウスラフ族、東はササン朝が隣接していた。

イスラムの誕生期において (7 世紀初め) ビザンツ帝国は、内部情勢が悪化していた。戦争をしては敗北が続いた。610 年にビザンツ帝国の指導者の職は、ヘラクレイオスの手に渡った。

ササン朝

イスラムの誕生期において、イランでは、ササン朝が存在した。お互いにライバルだったササン朝と東ローマの間では闘争が繰り返され、3 世紀近くも続いた。イスラムの誕生期においては、ササン朝の政治は混乱していた。

ギョクトウルク

イスラムの誕生期において全中央アジアのトルコ系民族の主権を握っていたのはギョクトウルクだった。ギョクトウルク政府が建設されてしばらく経つと、東と西のギョクトウルクが二つに分かれた（582年）。イスラムの誕生期には双方のギョクトウルク政府もまったく別の政府として存在していた。

インド

インドは、アジアの南にある三つの大きな半島の一つである。最古の政府以来、インドでは様々な人種、宗教と文化が人々によって築かれていった。

長い歴史において様々な民族移動があったインドでは整った政府が誕生することはなく、周辺の国とも国を建設することはなかった。

イスラムの誕生期において、インドでは封建制が支配していた。

中国

中国もインドの様な地理状況、民族と歴史が一つに纏らないような国だった。本来中国は、北で万里の長城、西では四川山脈、南と東にはシナ海に囲まれている。この境界の外側では、満州、モンゴル、東トルキスタンとチベットのような国があり、時々中国国内に進入することもあった。

イスラムの誕生期においては、中国では隋の煬帝が君臨していた。

日本

日本は、アジアの東に位置し、太平洋に浮かぶ島国である、ここはイスラムの誕生期、世界とアジアの政治と関係のある国ではなかった。

b) 宗教と信仰

ビザンツ帝国

ビザンツ人たちは、ギリシャ正教を信仰していた。その中心はイスタンブルだった。イスタンブルはギリシャ正教の本山だった。さらに、ビザンツ帝国において、単神論派と言われたキリスト教の異端が存在した。例えば、シリア教会アルメニア教会、アビシニア教会とエジプト教会という宗派がキリスト教には存在した。

ササン朝

イスラムの誕生期においてアラビアの、北と北東に存在したササン朝（紀元前226年～650年）は、アナトリア、シリア、パレスチナ、エジプトとアゼルバイジャンにおいてビザンツ帝国と政治闘争を繰り返していた。この闘争で、ビザンツ帝国がキリスト教異端宗派を禁止していた政策は、ササン朝の政策によって緩和された。ササン朝はこれを利用してしばしばビザンツ帝国の領土を侵食した。

イランとイランの周辺国で信仰されていた宗教は、ゾロアスター教である。

ギョクトウルク

イスラムの誕生期においてトルコ民族は、様々な宗教と文化に囲まれた生活を送っていた。

キリスト教徒、ゾロアスター教徒、仏教徒、マニ教徒ユダヤ教徒に関係した生活をトルコ人は送っていたのである。これらの宗教の存在を認めていた部分もある。しかしながら、これらを自らの信仰にするということにはなかった。トルコ人たちは、9世紀以来自らの信仰として、精神と気質の釣り合いのとれたイスラム教を完全に受け入れたのである。

インド

民族と文化が多様な国だったインドでは、多くの宗教が生まれた土地でもあった。イスラムの誕生期において、インドにおける宗教の一つがヒンドゥー教であった。この宗教によるとインド社会は様々な階級に分けられている。これはカースト制と言われる。このシステムの頂点にはブラフマンと言われる宗教者があり、最下層にはシュードラといわれる役職が設けられている。インドでは、紀元前6世紀にブッダ（紀元前563~483）によって作られた仏教とヒンドゥー教のような宗教が混在しており、全ての南アジアと極東の国々でもそうである。仏教とヒンドゥー教はイスラム教の誕生期にはインドで広く広まっていた。

中国

多くの異なった民族社会と原始的な文化の混在しながらひしめき合った中国では、イスラムの誕生期において主な三つの宗教があった。：儒教、タオイズム、そして仏教。

孔子は、当時政府の元で働いていた賢者のリーダーだった。彼は、人間が人間と接するとき、能力と道徳の優秀性に関する提案をした。孔子は自らに「宗教設立者」の称号を与えることは決してなかった。彼の提言は死後一つの宗教として認められた。儒教は、宗教よりさらに道徳を重視している。

タオイズムという宗教は、老子（紀元前604年）が建設した。この宗教は「タオ」という概念に沿って作られた。

タオイズムは、後に仏教と別の土地に宗教としての影響を与えた。

イスラム誕生期には、中国でキリスト教とユダヤ教はともに知られていなかった。

日本

日本では、イスラム誕生期に、中国を起源とする儒教とタオイズム、インド起源の仏教、そして日本古来の神道が存在した。

2 ヨーロッパ

a) 政治状況

大フン帝国の崩壊以後、フン族の一部が、西へ移動し、カスピ海とイディル川の間で西分帝国が建設された。

フン族は375年イディルとテン（ドン）川の西で事実上ヨーロッパを支配していた。ドナウ川の中央部分まで延びていた領土の全ての民族を支配していた。フン族のこの行動は、全てのヨーロッパの混乱と戦争の原因となった。この行動は、5世紀まで続き、ついには西ローマ帝国をも滅ぼした（476）。

西ローマ帝国の領土に関して、ローマ人たちが「バルバル」と性格づけていた国によって、おおくの政府が生まれた。この政府とは：ガリアでは（概してフランス）フランクとブルグント、イタリアではオスロゴート（東ゴート）、アフリカではヴァンダルである。これらの他に、アヴァール - トルコ政府があった。

東ローマ帝国は、ローマの完全なる相続人として 6 世紀までずっと、西のこれらの国々を支配した。ユスティニアヌス帝の時代では国境は最大になった。しかしながら、獲得した領土はすぐに失ってしまった。イスラムの誕生期には、ビザンツ帝国の支配下にあった土地の外側では、ヨーロッパにおいては政府と呼べるものはなかった。

a) 宗教と信仰

多くの神が偶像化されていたローマの宗教は、政府によって運営され、儀式が行われていた。ローマ人たちは、他の信仰に対しては寛容であった。征服した国の宗教と儀式も取り入れていった。ローマとユダヤの神々はそれぞれ混ざり合った。東の国々の宗教もローマでは支持されており、それらの名前は神殿に付けられた。ローマの宗教のこのように複合されていった中で、キリスト教が、エルサレムとその周辺で広まり始めた。ローマ帝国領土内でもキリスト教は急速に広まった。キリスト教徒は容赦ない追跡と拷問を受けた。しかしながら、全ての追跡と防止策にもかかわらずキリスト教の広まりは止まるところを知らなかった。キリスト教徒たちは、全ての街で教団を設立し、教会を立てて集会をした。

ローマ皇帝コンスタンティヌスは、312 年に、キリスト教を容認した。

6 世紀~7 世紀に続いた移動で、ヨーロッパに入ってきた別のヨーロッパ民族の中にも、キリスト教は広まった。

時期を同じくして、ローマから派遣された宣教師たちは、イタリア、スペイン、ドイツ、そしてスラブの国々に進出した。これらの国で、キリスト教は広まっていった。時のローマ法王は、広大なキリスト教帝国を築いたのだった。

ローマ教会を支配していたローマ法王たちの、ヨーロッパをキリスト教化するためにした事は、民族移動でヨーロッパに入ってきた多くのトルコ民族も（フン族、アヴァール族、マジャール族、その他）キリスト教化しながら支配していくことだった。

3、アフリカ

イスラムの誕生期には、ジブラルタル海峡から、シリア周辺までのアフリカの地中海沿岸地域は、ビザンツ帝国の支配下にあった。エジプト、イスラエル、シリアもビザンツ帝国の支配下にあった。

エジプトは紀元前 30 年にローマ帝国下に入った。エジプトではローマ人の知事がいたようだ。ローマ帝国の圧迫に直面し、エジプトではキリスト教が広まっていった。キリスト教は自由を許されていたので、エジプトでは多くの修道院が建てられ、牧師も多く、教会と修道院が広い土地を使った。彼らによって、エジプト政府の収入は減り、彼らは人々へ新しい税金を課した。彼らはエジプト人の平安も奪ったのだ。

エジプト人は、東ローマ帝国の公式の信仰ではなく、イエスの神性を拒絶したアレクサンドロスの修道士アウレリウスの見解を受け入れていた。325年のイズニク会議に参加した人たちは、父親と息子（アッラーとイエス）を、性質の観点から同等だとみなしたアウレリウスと支持者たちを異端として宣言した。この状態はキリスト教においてアウレリウス派として生まれた。アレクサンドロスに滞在していたビザンツのエジプト知事は、政府の公式宗教見解に同意しないエジプト人たちに酷い拷問と虐待を加えた。

エジプトの南で、紅海岸まであった地域で主権を握っていたのはエチオピアだった。エチオピアではキリスト教の信仰が存在した。アラブ人は、エチオピアと商業関係を築いていた。エチオピアも親アラブ的であり、アラビアで起きる出来事と無関係ではなかった。

B. イスラムの誕生と広まり

1. イスラム以前のアラビア半島

a) 政治状況

アラビア半島は、アジア大陸の南部にある三つの半島の中で最も大きな半島である。

アラビア半島は、古代から極東（インドと中国）とアフリカの国々と地中海の国々の間で行われる商業の橋としての役割を担ってきた。商隊は、半島の地理を詳しく理解していた。この道でもっとも栄えた所は、イエメンから始まるアカバ湾までとそこからシリアとエジプトまで続くヒジャーズ街道だった。このほかの内陸の谷を見てみるとメソポタミアと南シリアに続く道もあった。

人々

アラビア半島は、アラブ人もいたがセム系の故郷である。ここで生きたアラブ人は、南アラブと北アラブという二つの起源に分かれている。

南アラブ人たちは、イエメン人であり、一般的には定住して暮らしている。農業と商業を行っている。

北アラブ人は、大多数が遊牧民族だった。これらのなかには都市に定住する者もいた。北と南のアラブ人は、同じときに、様々な理由からそれぞれに相対しては離れ、イスラム教の誕生以降長期間にわたってそれらは繰り返された。

北と南のアラブの歴史の発展もそれぞれ別な経緯を持っている。

イスラム以前の南アラビア（イエメン）ではいくつかの政府が存在した。この政府のうちもっとも大切なのが：ミーナ朝（紀元前 1200~650）、セーベ朝（紀元前 950~115）、そしてヒムイェリ朝（紀元前 115~525）である。

イスラム以前の時代、アラビア半島の中央と北部では街という形の政府が、小さいながらも建設されていた。この政府も、南にあるもののように商業を営んでいた。組織について、発展段階や軍隊については何も明らかにはされていない。

これらの政府で最も重要なものとして、ナバティ族（紀元前 5 世紀前後~西暦 106）、テドミュル国（紀元前 1 世紀~西暦 272）、ガッサーニー国（3 世紀~636 年）、ラフミー国（226~602）、

そしてキングダ国(4世紀~529)がある。

イスラムの誕生以前の地域で最も重要な勢力の一つはガッサーニー政権だった。これら南北貿易の北端に定住しておりシリアのアラム語を学びキリスト教化した。5世紀を過ぎてビザンツの支配下に入った。ビザンツ人によってササン朝への緩衝国の一つとして存在した。最後のガッサーニー政権の7世紀にはムスリムではなかったが、その後完全にムスリム支配化に入った。

ヒジャーズのメッカでは、5世紀以来クライシュ族が主権を持っていた。この種族は都市の宗教と政治において他の都市と強い関係を持っていた。クライシュ族は商人を年に2回、夏には北へ、冬には南へ、大商隊を派遣した。クライシュ族は、イエメン、エチオピア、ビザンツ、そしてイランをつなぐ貿易に深く関わっていた。貿易はメッカの宗教、政治見解から経済見解までを発展させた。

遊牧民たちは、特に禁断の月と言われたときには宗教と商業の目的をもってヒジャーズで定住する人々の住む都市へしばしば行った。

ヒジャーズ

ヒジャーズという単語の意味は「丘」という意味で、ナジュド高原の端の平原から外れたセラト山脈へ続く島である。当時ヒジャーズとは、メッカ、ヤスリブ、ターイフが含まれていた地域を指さなかった。

イスラム史の見解からアラビア半島の最も重要な部分はヒジャーズであった。なぜなら、イスラム教はこの地域の三つの重要な都市の一つであるメッカで生まれ、ヤスリブで発展し、そこから全世界に広まっていったからである。

メッカ

バトラミウスがマジョラバル(ミクラブ:神殿)と呼んだ、メッカは紀元前2000年に建設されたと考えられている。宗教の伝統によれば最初はアダムによって建てられたというカーバは、メッカに対しての、アラビア都市の中における特別な優位性を獲得している。この原因としてヒジャーズ地方の中央であることが挙げられる。さらにメッカは、南にイエメン、北に地中海、東にバスラ海、そして西にアフリカ、その先には紅海へ続く商業道路の大きな駅がある。別の側面から見るとメッカは、アラブ人には神聖な場所なのである。アラブ人がここに旅をするときには、周辺でバザールや定期市が開かれていた。このバザールはこの経済見解も発展させた。この定期市でもっとも有名なのがウカーズの市であった。

ヤスリブ

メッカの500キロ程北に位置するメディナの旧名。イエメンとシリアの間にあるバハラト街道である以外にここはナツメヤシがよく育つオアシスである。メッカ人は、メディナ人が農業に携わっており裕福ではなかったので軽蔑していた。メディナでは、アラブ人たちと一緒にユダヤ人たちも住んでいた。メディナが重要実を持ったのは、622年のヒジュラ以降である。

b)宗教と信仰

南アラビアの人々の宗教は、多神教かつ偶像崇拜であった。彼らは、青い物体を使い「神」として受け入れ、それらをシンボル化し、それら偶像を崇拜した。

シリアと南アラビアでは、キリスト教の単神論信仰があった。

4世紀末以来、ユダヤ教もイエメンにおいて広まり、力を持ち始めた。ユダヤ教はイエメンで何世紀にも渡って続いた。1948年には、イエメンでは100,000ものユダヤ人がいた。イスラエル政府が作られてから、イエメンのユダヤ教徒の多くは、イスラエルへ移住した。

南アラビアの人々は、様々な理由をもって、中央と北アラビアへ移住し、その土地の宗教と信仰を受け入れた。

中央・北アラビア

中央・北アラビアにおけるアラビア人も偶像崇拝者である。しかし、都市でさらに発展した宗教がある。Nabatiの首都、ペトラで、カーバに似た神殿が建てられている。

ガッサーニーは、ビザンツ帝国とササン朝ペルシャの間に位置する、緩衝国であり、さらに政治を安定させる為に単神論派を受け入れている。

ヒジャーズ地方における遊牧民たちの宗教は、セム系の最も古く原始的な信仰に代表される。

この宗教の基礎は、他の原始的な信仰のような基礎でありアニミズム宗派に偏っている。

神の概念が作られてからにもかかわらず木、井戸、石、洞窟のようなものは、神を拜んでいた人から直接的に神聖なものとして捉え続けられた。浄化する人は、病気の治療法と命を与える水を砂漠の井戸として拜んだ。イスラムの歴史は研究者たちによるとゼムゼム井戸の神聖なイスラム以前の時代へ向けられている。

遊牧民たちは、隕石を、月と太陽として崇めていた。月を遊牧における印として、太陽を農業における印として崇めた。

メッカとカーバは全ての種族にとって神聖な場所として存在した。リヴァイェトによると、カーバの中には360の偶像があったという。これらのうちで最も重要だとされるものは「アッラーの三人の娘」とされるラト、ウツァ、メナートという偶像である。また、キリスト教徒たちによっても、胸に子供を抱いた聖母マリアの絵が飾られていたという。

カーバは、ムスリムたちによって毎年訪ねられ、商隊もここで一度は止まったという。

これらの他に偶像を崇拝していた、ユダヤ教でもキリスト教でもない、「イブラヒム教」というものを信仰していた集団もいた。これらはハニーフと言われる。

b) 社会と経済

アラビア人たちが用いていた方法によると、2つの方法がある。

- ・ 定住
- ・ 遊牧

都市で暮らしていたアラブ人たちは、一般的に農業と商業によって生計を立てており、それらを専門職としていた。

南アラビア海岸において、砂漠のオアシスにおいて、ターリフとヤスリブのような農業は営まれていた。イエメンにおいては小麦と大麦である：ウマンとハスラでは米、メッカ

では線香、アスイルではアラビアガムが栽培されていた。さらに、ターリフではあらゆる野菜類、果物類を栽培し、アラビアの農業の発展を支えた。

都市が裕福になる起源といえば、それは商業だった。アラビアは、極東の国々とアフリカと地中海の国々と商業の橋渡しをしていた。これにより、アラビアの古来よりこの国に暮らしていた人々は裕福だった。イエメンから始まり紅海まで続く北側を通過して地中海の海岸まで続くバハラ街道と、砂漠の谷を形成するメソポタミアと、シリアの南まで続く他の街道沿いの都市も裕福だった。

遊牧民たちは彼らの営みだった家畜を追う季節になると、牧草地を求めて歩き回った。彼らは動物たちと共に暮らしていた。

遊牧民たちは、必要なものを公正な手段で手に入れることができなかったので、襲撃や略奪によってそれらを手に入れる事を不都合なことだとは見ていなかった。

種族は族長の称号を与えられた者によって運営された。族長は、一族の中で将来を見定め、気前が良く勇気があり、年を重ねている人だった。しかし、族長は、定め、軍、行政、に関しては絶対的な権力を持っていたわけではなかった。一族の高官により形成される会議の決定が適応された。全ての問題においてそれらは相談された。

遊牧民の女性は、都市で暮らしていた女性より自由な身だった。しかし、男女平等という訳ではなかった。イスラム以前の定住あるいは移動していたアラビア人社会では男が重要なものとされ、多くの女性と結婚することができた。しかし女性は、結婚する男性を選ぶことと、夫婦関係がうまくいかなかったとき離婚する権利を有していた。男は好きなきに妻を離縁させることができたし、復縁することもできた。女性は、しかしながら、子供を産んだとき、亭主の家族として認めなければならなかった。一族で、男の子供がとても大切だった。女子を産んだ女性は罪深い者とされた。ときどき女子の子供は殺された。女性には相続権はなかった。

c) 言語と文芸

アラブ人が使用した言語はアラビア語であると言われる。イスラムの誕生期、アラビア語が話されていた地域は、アラビア半島と周辺だった。アラビア語が広く使われたことで、イスラムの誕生から今日まで続いた宗教、政治、文化、民族と経済の発展を生んだ。

南アラビアの人々の言語は、北に住んでいた人の言葉とは違っていった。エチオピア語に近かった。南アラブ人たちの言葉について書かれた最も古い文書は、紀元前8世紀から7世紀のものである。これらは金属や石に刻み込まれたものだった。

北アラビアの人々は、商業、政治、文化形成において、アラム語、シリア語を話し、記した。ユーフラテス川の下流の地域で暮らしていたキリスト教徒たちは、読み書きと宗教において、偶像崇拝者だったアラビア人に学んだ。

アラブ人たちは、イスラム以前の時代を「無明時代」と呼ぶ。文字通り学識のないという意味を指すのだが、この言葉は、アラブ人が、読み書きができない野蛮な人種だったと言うことを指しているのではない。この名前は、その時代においてアラブ社会の「アッラー

の啓示を受けた預言者と、ある書物の法に目覚めていなかったことを知らずに生きていた時代」ということを意味するために用いられていたのだ。

イスラム以前のアラブ人たちの間では文芸と言えば、碑文と詩が思い出される。

イスラム以前のアラブ人たちは韻、脚韻を踏んだ言葉を話す技術を発展させた。毎年、あらゆる闘争や争奪を禁止した月に、メッカに近いウカーズでは定期市が開かれていた。この定期市は、芸術と作物を展示することが、商業と消費生活をぶつけ合う大きなチャンスだった。さらに礼儀に縛られない自由な場所だった。文学者と詩人はそこに集まった人々に呼びかけ、詩を朗読したりした。一番に選ばれた詩人の詩は、紙に写されてカーバの壁に張り出された。そこからさらにすばらしい詩が読まれるまでその詩はそこに張り続けられる。それらの詩のうちの7つはとて有名でアラブ文芸として知られている。

カーバ

カーバは「牢獄城」という意味である。「牢獄城」(12x10x15m)という名が付けられているけれども、メッカにおけるとても神聖な建物とされている。「ハジ」と呼ばれるメッカに巡礼した人々によって作られたとされるカーバを、彼らは神の家と呼んだ。

偶像崇拜主義の時代のカーバは、見た目よりもはるかに、単純で素朴な刑務所のような建物であった。1つの空の石(隕石)と考えられているが、アラビア人たちに言わせると「黒い石」が、ここには置かれていた。

砂漠、遊牧、ラクダ、ナツメヤシ

砂漠、遊牧、ラクダそしてナツメヤシはそれぞれ調和の取れた4つの基本的な要素である。

砂漠は、そこで暮らしていた人々に社会を形成させた以外に、遊牧の一般化を促進し、言語と人種を形成した。さらに、外部からの敵には最大の防御となり、そこで暮らしていた人々には暮らしの知恵を与えた。

遊牧は、身体的精神的な形成と共に砂漠で生きる術だった：忍耐、甘えのない強い意思が必要だった。ナツメヤシは、ミルクを水として飲む事ができたし、食料としても重宝した。遊牧民が着る物は単純な者だった。

遊牧民たちは、自分たちを(政府的人民)として性格づけていた。事実、聖ウマルは「アラブ人は、ラクダが幸福と静寂を見つけた土地によって繁栄する」と言っている。ラクダがいない砂漠は、人が住める土地だとは考えられていなかった。ラクダはアラブ人の食料にもなり、生活の手段である。遊牧の行く末を左右すると言っても過言ではない。ラクダは乳、テントや服になる皮、食料、そして燃料となる糞を彼らに与える。遊牧はラクダがいなければできない。

ナツメヤシは、遊牧における食料となるものである。ナツメヤシと水は、アラブ人にとってとても重要な要素なのである。

2 . 聖ムハンマド、四代カリフ、ウマイヤ朝とアッバース朝におけるイスラム教の広まり 聖ムハンマドの時代

聖ムハンマドは、西暦によると、570年に生まれた。父親の名はアブドゥッラー、母親の名はアーミネといった。

父親のアブドゥッラーは、聖ムハンマドが生まれるまえに死んだ。祖父は彼に、ムハンマドという名を付けた。ムハンマドとは「称えられる人」という意味である。聖ムハンマドは六歳のときに母親をなくしている。祖父アブドゥルムッタリブは、母親と父親を亡くした孫を引き取って育てた。アブドゥルムッタリブはメッカの指導者が主催する集会に孫とよく出かけた。聖ムハンマドはこの話し合いを真剣に聞いていたという。その時期にムハンマドは、メッカの行政の詳細を、都市にいる一族の筆頭者たち、身近に見るこること、顔見知りになること、理解すること、が良いチャンスだと思っていた。

しかし、彼の祖父の命は長く続かなかった。8歳になると彼は祖父を亡くした。

祖父の遺言によると、聖ムハンマドのおじであるエブー・タリブが、甥の面倒を見る事になっていた。聖ムハンマドはおじの家で、大事に大切に育てられた。

聖ムハンマドは12歳になるとおじの付き添いで、商用でシリアへ行った。このように、初めてアラビア半島の外に出たのだ。聖ムハンマドは子供時代、青春時代を賢く、成熟した振る舞いで、正直に礼儀正しく、クライシュ族の中で尊敬される人物へとなっていったのである。そして、名前の前には「信頼された」という形容詞が付けられるようになった。

彼はクライシュ族の裕福な女性であるハティージェに、商売をしているときに会った。彼女は聖ムハンマドを、自分の隊商の責任者として責任を任せた。しばらくして、聖ムハンマドはハティージェと結婚した。

ハティージェと結婚してから、貧困から完全に抜け出た聖ムハンマドは、俗世間を離れる時間が多くなった。寂しい場所に引きこもって、段々と人との交流を無くしていった。メッカの外で見つけた洞窟に隠れて、深く考え事をするようになった。

そしてある日、ヒラー山の洞窟で、静かで真っ暗な中で瞑想をしているとき、彼は光り輝いた。寝ているとき天使ガブリエルは、彼に「おい、ムハンマドよ、全てを創造した神の名を言ってみろ」と言った。

これは最初の啓示だった。このときムハンマドは40歳だった(610年)。それから、天使ガブリエルは、続けざまにコーランに書かれていることを言った。この状態が20年続いた。このように聖ムハンマドはアッラーの使者となった。

聖ムハンマドは身近な人たちから布教活動を始めた。この宗教の名こそ、「イスラム教」である。イスラム教を受け入れた人たちはムスリムと呼ばれた。

イスラム教の基礎は、コーランという名の神聖な本に集約されている。コーランは、言葉と文芸の進む道にも大変な影響を与えた。さらにコーランは、イスラム史と法律の観点からも非常に重要な基礎となった。

聖ムハンマドは全ての人々にイスラム教へと招待した。最初は妻のハティージェ、親戚の聖アブー・バクル、聖アリー、そして奴隷のゼイドだった。彼を信じるものは日に日に増えていった。しかしクライシュ族の人々は、宗教と経済の主導権を失わないために、聖ムハンマドのこの運動に圧力を加え、弾圧し始めた。

聖ムハンマドは、これらに立ち向かい、クライシュ族の悪事にも耐え、ムスリムはどんどん力を強めていった。

巡礼の時期にメッカへ行ったヤスリブの隊商と、聖ムハンマドは出会った。聖ムハンマドを自分たちの町に招待することとムハンマドを指導者として迎えることを彼らは約束した。聖ムハンマドはヤスリブへ行くことを決め、622年に移動した。

この事件は、イスラム史においてヒジュラと呼ばれている。ヤスリブは、メディナの街(預言者の街)という名が付けられた。聖ムハンマドは、イスラム教をここから広めることを続けた。イスラム政権の基礎をここで築き、イスラム社会の宗教と政治の始まりとして努めた。短期間の内に彼を信じるものは急激に増えた。

聖ムハンマドは、メディナの全ての訴訟を受け持った。メディナと周辺にある政府を築いた。この政府の指導者、司令官、裁判官は聖ムハンマドだった。ここで暮らしたユダヤ人たちもこの政府を祖国としてムスリムと同等の権利を持ち、信仰と儀式を自由に行うことができた。

この後聖ムハンマドは、イスラム教の思想と原理に関する全ての説明をもって適応されたコミュニティを築いた。全ての労働をイスラム教のために捧げた。最も大きな障害勢力だったのはクライシュ族とメッカだった。なぜなら、彼らはムスリムになることを拒み続けたのだ。彼らを導く手段が、困難であることを知っていた聖ムハンマドは、クライシュ族の商隊に相對することにした。

ヒジュラの意味と重要性

ヒジュラは、アラビア語である。意味は「移動すること」である。しかしこの単語はイスラム史における単語である。622年に聖ムハンマドとムスリムが信仰のために、拡大し、全ての始まりである国を、財産を放棄して、メディナへ移動した。しかし全ての移動がヒジュラであるわけではない。

ヒジュラを行った者たちをムハジールという：ムハジールたちを重い圧力から救い、一切れの食べ物を与え、水を与えたメディナ人たちはアンサーールと呼ばれた。アンサーールとは「救済する人」という意味である。

ヒジュラは、聖ムハンマドとムスリムの人生において、イスラムと世界の歴史に重要性を残し、後の歴史を大きく変えた事件だった。

ヒジュラは逃亡ではない。二年間に渡る議論の結果、用意周到に計画され、用心深くなされた行動である。

メッカの時代を終わらせ、メディナの時代をもたらしたヒジュラは、望まれない人として生まれ育った都市を放棄した聖ムハンマドが、尊敬すべき1つの政権指導者として受け入れられた歴史なのである。なぜなら、ヒジュラと共にメディナのイスラム政権は基礎を築き、聖ムハンマドが預言者でありながら政権を築いた政治家としての重要性も明確化したからなのである。

メッカで弾圧と拷問に直面したムスリムたちはヒジュラによって苦痛から解放された。聖ムハンマドと最初のムスリムたちは、12年間に渡り自らの血と魂にかけて、あらゆる自己犠牲と困難さを持って、150~200人のイスラム教コミュニティを築くことができたのである。クライシュ族のまったくの固さ、石のように固い対立と敵対行動を破らなければ、これからさらに発展し、拡大することは不可能だった。ヒジュラ後の10年間の内にムスリムは、メッカを占領し、その10年間の間にもイスラム教は、アラビア半島の外にも出て、エジプト、シリア、イラクに広まった。

ヒジュラから17年後、カリフ聖オメルは、イスラムと世界史において大変重要なこの事件(622)を、ムスリムのための暦(ヒジュラ暦)の始まりと定めた。

ベディルの戦い

：メディナ政権は、クライシュ族に対して624年、ナフレ出征を行った。これを、イスラム史において最も重要な戦いの1つとしてベディルの戦いという。624年にシリアから帰国途中だった裕福なクライシュ族の隊商を襲撃しようとした聖ムハンマドは、行動に出た。しかし、多勢だったクライシュは軍隊を用いて応戦した。

戦いの最後はクライシュ族の負けだった。クライシュ族の多くは殺された。

ベディルの戦いはイスラム史における最初で最も大切な勝利である。この勝利によってムスリムは生き残り、拡大し始めた。ベディルの戦いは、イスラムの運命を明らかなものとした。捕虜たちの少しは殺されたが、大勢は救われ、銀貨を与えられ、自由の身になった。読み書きができた捕虜たちは、一人当たり10人のムスリムに読み書きを教える役割が与えられた。

聖ムハンマドは、ベディルの勝利の後、それまでムスリムと協定を結んでいたユダヤ人を、メディナから追い出した。

ベディルの戦いは、聖ムハンマドをメディナの指導者であり素晴らしい司令官としての印象を人々に与えた。

ウフドの戦い

ムスリムは、ベディルにおいてクライシュ族にとても重い敗北感を与えた。しかしクライシュ族は、隊商に起こった事件にも屈せず、抵抗し続けた。ムスリムたちは、クライシュ族の対象をまた襲撃しようとし、ベディルの復讐を誓ったクライシュ族は行動に出た。

クライシュ族は、エブー・スフヤーンの指導の下、軍隊を派遣した。クライシュの軍隊は、625年にメディナの近くで本部を設置した。聖ムハンマドはそれを知るや否や応戦体制に入った。結果は、都市から出ずに籠城することに決めた。しかし、ベディルにおいて勇敢な行為を示せなかった若者たちは、聖ムハンマドの考えを変えた。そして、聖ムハンマドは都市から離れた。ウフド山の近くまで行った。双方の間で激しい衝突が始まった。

625年にウフド山の麓において展開された戦いで、優勢に立っていたムスリムたちは油断して自陣の守護をおろそかにした。その結果、ムスリムは大敗した。聖ムハンマドはこの戦いで負傷した。彼のおじ聖ハムザは殉教した。クライシュは、ベディルの復讐ができた信じ引き返していったのだが、聖ムハンマドはクライシュの跡を追った。このことで敗戦がはっきりすることを彼は望んでいなかったのだ。

聖ムハンマドは、ウフドの後、この敗戦により意気消沈したいくつかのアラブ族の軍隊を集めて派遣した。ウフドの戦いの間メッカとの関係を築いたユダヤ人をメディナから追い出した。このように、ムスリムは武器と食料を確保していったのだ。

聖ムハンマドはウフドの戦いの後にクライシュの隊商に対する襲撃を停止させた。その目的は、メッカとメディナの間に住む種族を味方にし、クライシュ族を孤立化することだった。

ハンダクの戦い

メッカ人は、聖ムハンマドの計画を理解し、行動に出た。627年、同盟関係にある種族から軍隊を形成し、メディナへ遠征した。聖ムハンマドはメッカ人の計画に関するありとあらゆる情報を集めた。メディナから外に出て、防衛戦争を行うことに決めた。新たにイスラム教を受け入れたサルマーネ・ファールスィーの提案により街の周辺に、馬が飛び越えられないような広くて深い塹壕を掘ることとなった。

クライシュ族とその同盟諸国は、このどうしようもない事態に直面し、ただただ当惑するだけだった。完全に理解しあっていない間柄の同盟国は、長引く包囲戦に、疑いを抱き始めた。聖ムハンマドは、メッカの同盟国を説得し、包囲を解いて退却させることに成功した。

クライシュ族とその同盟諸国が撤退した日、聖ムハンマドは、メッカと秘密裏にクライシュ族、ユダヤ人の元へ向かった。包囲戦に2,3週間抵抗した彼らもついには降伏した。

ヘンデクの戦いによって、ムスリムの国が確固たるものになった。

フダイビヤの盟約

聖ムハンマドは 628 年に礼拝に向かうことを決定した。ムスリムと共にフダイビヤと呼ばれる土地へ向かった。しかし、聖ムハンマドの目的を知らなかったメッカ側は戦争の準備をしていた。聖ムハンマドは使者を送り、その目的が戦争ではなく、メッカ巡礼であることを伝えた。クライシュ族はムスリムが武装していないことを知り、受け入れた。長い会談の末に双方の間で条約が結ばれた（628 年）。イスラム史においてフダイビヤの盟約として知られるこの条約とは、

- ・ 双方は 10 年間武力行使をしない
- ・ 双方共に、どの部族とも条約を結ぶことができる
- ・ 保護者の許可を有しないクライシュ族がムハンマド側についたときには、彼は追い出されるが、ムスリムがクライシュ側についた場合はそうではない。
- ・ 聖ムハンマドとムスリムは、今年メッカから引き返すが、来年は巡礼のためにメッカに 3 日間滞在することができる。

メッカに入らずに引き返したムハンマドたちだったが、来年 3 日間は巡礼のために滞在することとなったのである。

フダイビヤの盟約は、聖ムハンマドが将来を見据えた人間だということを証明している。

ハイバル遠征

聖ムハンマドの、フダイビヤの盟約の後実現した最も大切な事件は、ハイバルの占領である。なぜなら、ハイバルの塔に住むユダヤ人たちは、ハンダクの戦いにおいてクライシュ族を支持していたからである。ハイバルは、メディナとシリアの交通の上で最も大切な土地であった。聖ムハンマドは、ハイバルの塔を攻めた。包囲戦となり、ユダヤ人たちはすぐに街を放棄した。ハイバルの占領をもってアラビア半島ではムスリムに抵抗するユダヤ人勢力が消滅した。

629 年にムスリムは、フダイビヤの盟約に従い、メッカへ巡礼し、3 日間滞在したのだった。

ムーテ出征

629 年にあるムスリムの偵察隊は、ガッサーニーによって待ち伏せされていた。聖ムハンマドは、大群を北方へ遠征した。ムスリムは、ルート湖の南に位置するムーテにおいてビザンツ軍と衝突した。その戦いでは大敗してしまった。ハリド・ビン・ワリードは司令官を仰せつかっていたが、多くの兵を失いつつ退却したのだった。

メッカの占領

聖ムハンマドは、クライシュに対して自分が優勢に立っていることを感じ、新たに出征することを決定した。メッカへと向かった。聖ムハンマドの目的を知ったクライシュ族の指導者エブー・スフヤーンは、和解を申し出たが実現しなかった。

エブー・スフヤーンは聖ムハンマドの下へ使者を送った。しかし、ムスリムは受け入れず、大軍がメッカに入城した。

聖ムハンマドはカーバに入り、神殿の中や外にあった偶像を全て破壊した。

フナインの戦い

メッカの占領の後、聖ムハンマドはムスリムに対抗するために終結した諸部族と対峙した。聖ムハンマドが指揮する軍は、フナインの谷で諸部族連合軍に待ち伏せされていたのだ。しかし、ムスリムはすぐに団結した。フナインと呼ばれる土地で繰り広げられたこの戦いで、ムスリムは勝利を収めた。この後、ターイフを包囲した。ターイフはすぐに放棄された。(630)

メッカの占領後、聖ムハンマドはメディナへ戻った。戦功はアラビア半島全土で深く響き渡った。この時期、バフレイン、ウマン、イエマーメ地方からやってきた集団がイスラム教に改心した。この間、聖ムハンマドは征服下にある地方へ義援金を集めるために役人を派遣した。

メッカの占領後の2年の間に、バスラ湾とインド洋まで全てのアラビア半島の種族は、イスラム教徒となった。

タブーク遠征

聖ムハンマドは、ムーテにおける敗北の復讐のため、そして北アラビア半島を脅迫したいと思っていた。ビザンツ皇帝がアラビア半島へ出征する準備をしているという情報を手にし、聖ムハンマドは北方へ軍を派遣し、タブークと呼ばれる土地へ向かった。しかし、この情報が誤報だったということがわかり、10日間の滞在のあと引き返した。

ヴェダ 巡礼

632年の初め、聖ムハンマドは大勢のムスリムと共に巡礼のためにメディナからメッカへと向かった。この巡礼は、イスラム史においてヴェダ巡礼と言われている。

聖ムハンマドの死

ヴェダ巡礼の後、ムハンマドはメディナへ戻った。ビザンツに対抗するために再び遠征することを決めた。しかし、軍隊を派遣できず、聖ムハンマドの疲労は溜まっていった。632年6月8日月曜日に彼は亡くなった。あくる日に、彼は葬られた。

四代カリフ時代 (632 ~ 661)

聖アブー・バクルのカリフ時代(632 ~ 634)

聖アブー・バクルの最初の年、聖なる預言者の死後義援金(ザカート)を拒む部族は反乱を起こした。聖アブー・バクルは、これらを屈しなかった。預言者であることを主張する偽者たちに武力を用い、圧迫した。このように、イスラム教は崩壊の危機から救われたのだ。全アラビア半島、メディナ周辺は再び統一された。こういった動きの中で、ハリド・ビン・ワリードの功績は著しかった。イスラム軍を率い、ヒレイを占領し、ユーフラテスとチグリスまで前進したのだ。

イエルムークの勝利

イスラム軍の整然とした征服政府の最初の国は、シリアであった。この地域は、ビザンツの統治下にあった。聖アブー・バクルは、軍隊を北方へ派遣し、パレスチナまで改進した。

ハリド・ビン・ワリードが指揮を執っていた軍もシリアへ送られていた。シリアにおけるガッサーニーを打ち負かした彼は、ビザンツの軍とシェリア川から分岐しているイエルムーク川の畔において衝突した。彼はビザンツ軍を撃退した(634)。イエルムークの勝利は、征服者の先駆けとしての最初の最も大きな勝利であった。このように、シリアの閉じられた門はイスラム軍によって開かれたのであった。

コーランの文を結集した本が世に登場した。聖アブー・バクルの時代になされたことのうちで重要な一つである。

コーランの文は、紙や石、骨の上にかかれるか、あるいは専門の人によって暗記されていた。それまでであった戦争で暗記していた人の所在が分からなくなっていたので、聖アブー・バクルはコーランを一冊の本にするためにゼイド・ビン・サービットに命令した。

ゼイドは長く苦しい努力の結果、使命を果たすことができた。

聖アブー・バクルは、イスラム史上最も重要な一人である。イスラム教を最初に受け入れた4人の中の1人であり、聖ムハンマドの側を片時も離れなかったという。イスラム教の普及のためにあらゆる自己犠牲を厭わなかったという。聖ムハンマドの死後、イスラム政権を崩壊から救ったのだ。

聖ウマルの時代(634 ~ 644)

シリアの占領

聖アブー・バクルの死後、彼の後を継いだのが聖ウマルだった。聖ウマルは征服に力を注いだ。ムスリム化したアラブ人たちは、アラビア半島から出てイラン、シリア、そしてエジプトと遠征を繰り返していった。

聖アブー・バクルの時代に始まったシリアにおける征服はこの時代も続いた。聖ウマルは、イスラム軍の総司令官にアブー・ウベイデを任命した。ビザンツ軍に対する二つの重要な勝利を彼はもたらした。イスラム軍はシャムに遠征した。シリアの首都であったシャムは、強い城壁によって守られていた。シャムは、6ヶ月もの間包囲され続け、635年ついに降伏した。キリスト教徒は宗教と信仰の自由を失った。

イスラム軍は、シリアにおける前進を続けた。パールベックが降伏した。フムスにいたビザンツ皇帝ヘラクレイオスは、ムスリムを止めることは不可能であることを知り、シリアから撤退した。短期間のうちに、シリアの多くはムスリムの手に落ちた。636年には、シリアの征服は完了した。ヨルダンとパレスチナも征服した。

エルサレムは、その時期イスタンブルからの援軍を望んでいた。皇帝ヘラクレイオスは、海の道を通して援軍に出た。これに対して、シリアにいた全てのイスラム軍が集結した。エジナディンと呼ばれた土地でビザンツ軍を撃破した。すでに、シリアとパレスチナにも

イスラム軍が待ち構えていたので、ビザンツ軍は撤退する他なかった。エルサレムは包囲された。エルサレムの大司教は、カリフに降伏することを伝えた。聖ウマルは、大司教と終戦条約を結んだ。キリスト教徒は、税金を支払うという条件で赦免された。聖ウマルはキリスト教徒に対して、寛大に信仰の自由権を与えた。637年、エルサレムはムスリムに降伏した。

イランの征服

この時代、イランにおけるササン朝内で王位継承争いが起こっていた。聖ウマルは征服のためにイランに軍隊を派遣した。ムスリムは、ユーフラテスを渡るために橋を架け、対するササン朝の軍隊に攻撃をしかけた。しかし、援軍の付いたイラン軍は、ムスリムを撃退した(634)。橋の戦いとして知られているこの戦いの後、ササン朝の首都における混乱は続き、イラン軍は撤退した。これによって、イスラム軍はユーフラテス川を渡り、ディジュレまで前進した。

ササン朝は、司令官の1人リュステムを、ムスリムに対して出征させた。聖ウマルも司令官の1人をササン朝征服のために派遣した。クーフェ近郊のカーディスィーヤと呼ばれる土地で両軍は対峙し、ムスリムたちが勝利を収めた(636)。カーディスィーヤの戦いでイラクは、イラク人の手から離れた。イランの道はムスリムのものとなった。イスラム軍は前進を続けササン朝の首都であるマダーインに入城した。ササン朝政府は集められる限りの兵力を持って応戦したが、ついに陥落した(637)。642年にはニハーヴァンドの戦いで両軍は再び対決した。ササン朝軍は統制が取れずに崩壊した。イスラム軍は対抗する小さな勢力を打ち砕きながら、イランの都市を次々に手中に収めて言った。聖ウマルのカリフとしての偉大さは、ついにイラン全土をムスリムのものにするほどのものであった。

エル・ジェジーレの占領

シリア、イラク、そしてイランを占領した後、エル・ジェジーレ(メソポタミア北部)を639年に占領した。

アゼルバイジャンの占領

イスラム軍は南方からイランに侵入し、反対側まで前進し続けて北に突き抜け、アゼルバイジャンに到達した。643~644年にアゼルバイジャンの中心地レイという都市を含め、アゼルバイジャン全領土を征服した。イスラム軍は、カフカス地方とアラル湖まで前進した。このように、聖ウマルの10年にわたるカリフ時代に、イラク、イラン、東アナトリア、アゼルバイジャン、そしてシリアがイスラムの支配下に入ったのである。

エジプトの占領

シリアの占領の後エジプトの占領も行われた。あまり苦労はないような状態だった。エジプトは、ササン朝とビザンツ帝国の管理下にあった。ビザンツは、宗派問題のためにエジプトとはあまり良い関係を持っていなかった。ここにビザンツの息がかかっていることは、ムスリムにとっては脅威だった。このため、アムル・イブン・アルアースがパレスチナの占領の後、エジプト占領のために出征した。しかし、皇帝ヘラクレイオスが死に、アムル

の占領は簡単に終わった。641年にバビロン、642年にはアレクサンドリアを攻略した。643年はリビア砂漠までバルカ、エジプト南部も占領した。アムルは、エジプトでフスタートという都市を建設し、自らの名前にちなんだジャミイを建てた。

聖ウマルは、一奴隷によってお祈りの時に喉を切られて殺害された。(644)

聖オスマンの時代(644~656)

聖ウマルの死後聖オスマンがカリフになった。

聖オスマンはカリフになったとき、イスラム支配下にあったイラン、アゼルバイジャン、そして北アフリカの統治を続行した。聖オスマンは、イランの統治を完全に行った。イスラム軍は652年カフカス地方を過ぎ去り、ハザールの一大都市ベレンジェで前進を阻止された。この歴史から始まり9世紀末までハザールはムスリムと敵対関係にあった。両者は時には勝利を収め、時には敗れた。肉体的にも精神的にも疲労させるこの戦いの結末は、カフカス山脈を国境と定められて終わった。

シリアと、エルジェジーラの占領の後、イスラム軍は、アナトリアのトロスに向かって前進した。一方では北アフリカのリビアも手中に収めた。

聖オスマンのカリフ時代、シリアの知事だったムアーウィアが、シリアで最初のイスラム海軍を作った。キプロスや周辺の島々に出征した。イスラム海軍は短期間のうちに成長し、ビザンツ海軍と死闘を繰り返した。イスラム海軍は、655年にフェニキアで行われたビザンツ軍との海戦に勝利している。聖オスマンは、総督職と司令官職に関して重要なポストに親戚を置いていた。この採用方法によって、政府の中での不満はつものっていった。総督職の人事に不満を抱えた人々はこれに加わった。聖オスマンはこういったことに直面し、事態を收拾する措置が取れず、告訴をしに来た人々によって殺された。

聖オスマンの時代に、聖アブー・バクルによって一冊に集結されたコーランは、再編され、現在のような形になった。そして、写本がつくられ、軍の野営にも送られた。

聖アリーの時代(656~661)

聖オスマンの死後、聖アリーがカリフとなった。(656)

聖アリーの時代は、内部に混乱が起こり、過ぎていった。ウマイヤ家出身のシリア総督ムアーウィア(エメーヴィ)は、聖アリーを聖オスマン殺害の容疑に曝し、カリフに相応しくないことを説いた。ムスリムと前進を共にしてきたタルハとジュベイルは、不満を溜め、聖アリーに対する反対勢力として立ち上がった。聖アイシェも彼らに加勢した。タルハ、ジュベイル、アイシェはアリーに反旗を翻したのだった。聖アリーもこれに応戦した。この戦いので、タルハとジュベイルは命を落とした。聖アイシェに対して拷問は行われなかった。この戦いは聖アイシェが乗っていたラクダの周りでなされたために、**ラクダの戦い(656)**と呼ばれる。こうして、聖アリーはイラクをコントロールしていった。クーフェの街に遷都した。

シリアにおいて、自らの権力を用いて軍隊を構築したムアーウィアは、聖アリーが気に

食わなかった。聖アリーの平和交渉は上手くいかなかった。ユーフラテス川のスフイー
ンと呼ばれた土地で行われた戦い(657)で敗れたムアーウィアは、アムル・ビン・アルア
ースによって救われた。ムアーウィアは軍に、槍の先にコーランを掲げさせ、不和の調停を
『コーラン』に求めることを提案した。聖アリーはこれが策略である事を知りながらも、
自分の軍隊に攻撃を続行させる事ができなかった。そしてイスラム軍は、その提案に応じ
る事にした。この出来事はイスラム史において、「ハーケム事件」と呼ばれる。ムアーウィ
アとアムル・ビン・アルアースは、恵まれた洞察力を用いて策略を練り、聖アリー側を仲
間割れさせた。ある部隊を、聖アリーの味方から離したのである。彼らの事を、イスラム
史においては、ハリッジーという。聖アリーは彼らを征伐しようとしたが、ハリッジーは
イスラム史において、様々な名前と主張を、何世紀にも渡り続けていったのだ。
聖アリーの死をもって、4代カリフ時代は終わる。

ウマイヤ朝 661~750)

聖アリーの死後クーフェでは、息子ハサンがカリフと認められた。聖ハサンは、ムアーウ
ィエに対抗できる力を有さず、イスラム帝国が崩壊する事を望んでいなかったので、いく
つかの条件と引き換えにムアーウィアに政権を譲った。このようにイスラム史においてウ
マイヤ朝と呼ばれる新しい政権が始まった。

ウマイヤ朝の設立者はムアーウィアである。ムアーウィアはウマイヤ家出身である。聖
オスマンの時代にシリア総督に任命された。そこで原則的な教育を受けた従順な軍隊を設
立している。

ムアーウィアのまず、首都をシリアのシャムに遷都した。なぜなら、シリアは彼の力が
最も及んでいる地域だったからだ。

ムアーウィアは、政権の世襲制を構想していた。ムアーウィアは、イスラム政権を、ビ
ザンツとササン朝を模範にした組織体にし、アラビア帝国を構築した。

ウマイヤ朝は、聖オスマンの息子の時代以来支配していた地域を再び統治し、イスラム
帝国史上最も領土が広い国を作った。スペインからトルキスタンまでの広大な国を統治し
始めた。

ウマイヤ朝におけるイスラム教の広まり

ムアーウィアは、ウマイヤ朝を建設し、国内を鎮めた後、ホラサン総督という地位を作っ
た。イスラム軍は、674年ジェイフン族を完全にイスラム化した。ブハラとサマルカンドも
占領した。

エジプトで行動を起こしたイスラム軍は地中海岸を続く征服を続けた。670年にはエジプ
ト、北アフリカをつなぐ街道上にカイラヴァンという駐屯地を建設した。

ムアーウィアの時代にイスラムの勢いは、ロードス島、ギリト島に及んだ。イスタンブ
ルは二回包囲した。最初の包囲(668)では、かつてムハンマドの旗手を務めていた、アブー・

アイユーブ・ハリッド・ビン・ゼイド・アルエンサール(エユッブ-スルタン)が戦死した。2回目の包囲は長期間(674~680)に渡るものだったが、功は奏されなかった。

ムアーウィアの後にかリフとなった息子イエジド1世の時代(680~683)、聖アリーの末子、聖フセインがカリフの座を認めなかった。イエジドは、聖フセインと協力者を殺害した。この事件は、イスラム世界において永きに渡り行われる争いとなった。聖フセインの殺害は(680)、全てのムスリムに深い衝撃を与えた。イエジドの時代、北アフリカの征服は続けられた。国境と、大西洋岸まで領土は広がった。

カリフアブドアルマルクの時代では、トルコの前進を示した多くの司令官達が、征服を行っていた。アナトリアにおける現在のチュクロヴァ地方においてビザンツ人たちは敗戦を重ねていった。ビザンツは、北アフリカから退却し、イスラム政権の国境、大西洋までたどり着いた。シチリアとサルデニア諸島へ襲撃した。

スペインは、タルク・ビン・ジヤドによって占領された(751)。イスタンブルは、地上と海上から包囲されたが、陥落はしなかった。

8世紀の初め以来アッバースがイラク、イラン、ホラサンで力を蓄え、ウマイヤ朝に対抗し、隠密行動を開始した。

その後、国内における混乱が続いた。アラブ諸族の間で不満もたまってきた。ウマイヤ朝内でも説明されないような事が起こり始めた。その結果、ホラサンにおけるアッバースが密かに指導者であるアブー・ムスリムが反乱しようと計画していた。ウマイヤ朝の最後のホラサン総督を打ち負かしたアブー・ムスリムは、立ちはだかるカリフメルヴァン2世率いる軍隊をも撃破し、この王朝にピリオドを打った。

ウマイヤ朝のアブドゥッラーフマンは、スペインへ逃亡した。そこで、後ウマイヤ朝を建設した。

マーワラーシナフルとトルキスタンの征服

イスラム軍は、まだ聖オスマンの時代にホラサン地方を征服した。ムアーウィアの時代には大勢のアラブ人が、ホラサンへ移住し、そこは東方へ勢力を伸ばすための基点として開発された。アブドアルマルクの時代まで、マーワラーシナフルとトルキスタンを襲撃することに成功したが、駐屯する事はできなかった。アブドアルマルクは東方の全地域を統括する総督の座に、ハジャージを任命した。

クテイベ・ビン・ムスリムは、ハジャージによって705年、ホラサン総督に任命された。クテイベは、マーワラーシナフルの征服のために大軍をつれて出征した。まず、トハリスタンからベルフを獲得した。

彼の時代、民族の多くがトルコ系だったマーワラーシナフルにおいて纏まった政府はなかった。ここから利益を得ていたクテイベは、まずベイケントを占領した。ここで略奪を行い、全てを焼き払った。大変多くのトルコ系の民族が殺害された。その前に、プハラを占領していて、ここへ軍隊を駐屯させた。サマルカンドのトルコ系民族は、ウマイヤ朝の支配下にあった。税金を払う条件でクテイベと調停した。711年にも、ハリズム地方を占領

した。

クテイベは、713年にタシュケントとフェルガナ地方に軍を派遣した。イスラム軍はタシュケント(シャシュ)を征服した。このように中央アジアでイスラムによる征服範囲は拡大していった。

スペインの占領

ヴェリド1世は、北アフリカにおけるイスラム軍の司令官としてムサ・ビン・ヌサイルを任命した。ムサは、ビザンツ領であるセプテを占領した。当時、スペインではヴィジゴットと呼ばれていた。

ムサは、カリフの承諾をとり、スペインに偵察部隊を派遣した。その後、タルク・ビン・ジヤドが司令官を務める一行がセプテ海峡(ジブラルタル海峡)を渡り、スペインへ向かった。711年、イスラム軍とヴィジゴットは衝突した。ヴィジゴットは陥落し、王は殺された。ムサは、712年スペインへ出兵した。現在のポルトガルを占領した。このように小さな幾つかの地方、そしてスペイン全土はムスリムによって征服された。

729年にスペイン総督であるアブドゥッラーフマン・アルガフィキがピレネーに赴き、フランスを占領するために多くの都市を落とした。しかしポワティエでフランクのシャルルマーニュとの戦いでアブドゥッラーフマンが殺されて、イスラム軍は敗北した(732)。この敗北によってヨーロッパにおけるイスラムの勢いは止まった。ムスリムは、フランスから奪ったピレネーを失った。ポワティエの敗戦の後、北アフリカとスペインは混乱が続いた。

後ウマイヤ朝(756~1031)

アッバースの大虐殺の後、カリフヒシャムの孫であるアブドゥッラーフマンは、シyamから逃亡して、スペインへ渡り後ウマイヤ朝を建設した。

アブドゥッラーフマンは、長い逃亡の後、スペインを統治した。コルトバを首都にした。国内外における成功の後、自らの名において、経済も運営した。この政権の時代、ビザンツとは友好関係を築いた。非常に重要な都市となり、農業と商業が非常に発展した。

後ウマイヤ朝は、1031年に崩壊した。この政権の崩壊と共に、大小様々の、20以上の政権が生まれた。この勢力は、スペインにおけるキリスト教勢力に対抗できず、次々に崩壊していった。

後ウマイヤ朝の崩壊の後藩主による統治が始まった。この政権においてもっとも重要なものが、ベニアフメル政権である。この政権の中心地はグラナダであった。この政権の時代、文明は非常に発達した。グラナダに立てられたアルハンブラ宮殿は、イスラム芸術において最も重要な基礎となっている。

スペインにいたアラゴン王と、カスティリア女王が結婚した。この二人の王の結婚により、軍は大きなものとなった。彼らは、グラナダを奪った(1492)。イスラム教に関して書かれた全ての文書は集められて、焼かれた。自国領における人民が、イスラムを改宗することを彼らは望んでいた。改宗する事を望まない人々に対しては、国外追放か処刑した。文

明の基礎を、彼らは焼き尽くしてしまったのだ。このように、スペインにおけるムスリムの支配は終わった。

ムスリムは、スペインにおいて大虐殺され、オスマン政権はルメリとバルカン半島において新たな征服を開始していた。これにもかかわらず、スペインにいたムスリムは、アフリカ岸に辿り着いていた。さらに、ムスリムたちと運命を共に分かち合っているユダヤ人たちも宗教の違いに関わらず救った。

これらの一部はオスマン社会に定住し、トルコにおけるユダヤ人は大きな役割を担うようになった。

アッバース朝(750~1258)

アッバース朝の設立者であるアブアルアッバースアブドゥッラーは、聖ムハンマドのおじ、アッバースの孫である。ゆえに、この政権はアッバース朝と呼ばれる。

アブドゥッラーは、全てのウマイヤ残党を殺し、アッバース朝を建設した(750)。イラクにおけるハシミィエ(アンバール)を首都とした。その後、アッバース朝の2代目カリフアルマンスールの時代にバグダッドに遷都された。

アッバース朝において、751年ムスリムであるアラブ人と中国人の間で行われたタラス河畔の戦いにおいてアラブに味方したトルコ系民族は、戦いの勝利に大きく貢献した。この戦いの後イスラム教は、トルコ民族の間に広まった。そして、アッバース朝はトルコ民族が力を持つ政権となっていった。

500年以上続いたアッバース朝において、37人のカリフがその職を全うした。彼らのうちで最も有力だったのが、ハールーンアッラシードだった。

彼の時代、バグダッドは文化の中心として非常に発展した。彼は、フランスにおけるカロリン帝国と友好関係を築き、ビザンツに対しては優勢に立っていた。彼の息子メムンの時代は重要だった。トルコ民族は、政権において重要な役割を担っていた。軍隊を指揮していたのは全てトルコ民族だった。彼の時代と彼の後、アッバース朝の領土は拡大した。アッバース軍は、トロスを突き抜けアナトリアに侵攻した。アッバース朝は、ビザンツによってなされた出征のために、アナトリアでアヴァスムという名の州を国境地帯に建設した。アダナ、タルスス、マラトヤ、マラス、アンタクヤ、アヴァスムという名前だった。ここからビザンツに大軍を送り出したのだった。

アッバース朝は、イスラム史においてウマイヤ朝のような広大な領土とイスラム教圏を拡大する事に成功していないが、学問的に非常に発達した。

アッバース朝はスペインからマーワラーシナフルまで広がる広大な土地を手に入れることができなかった。カリフの影響力が及ばないのだ。革命を起こそうとしている総督には重役は与えられなかった。政治の中心からとても遠くに位置する地方は、政権から離れ始めた。多くの土地で忠誠心のない藩主が明らかになった。アッバース朝は分裂した。分裂した政権は、ターヒリー朝、サッフアーリー朝、ハムダーニー朝、ブベイホウル朝だった。

ブベイハウル朝(945~1055)は、トルコ民族を殺し、何世紀にも渡ってバグダッドを支配していた。アッバースのカリフをコントロールしていた。

13世紀、モンゴルが西方に進出してきたとき、アッバース朝は抵抗できなかった。モンゴルの分裂の後にイランではイルハン朝を立てたフラグが、バグダッドを征服した。このように、バグダッドにおけるアッバース朝は崩壊した。

バグダッドがモンゴル人によって占領されてから、最後のアッバース朝カリフの一族だった1人が、エジプトへ逃げマムルーク朝に亡命した。マムルークのスルタンバイバルスによって、エジプトでカリフ宣言がなされた。エジプトにおけるアッバースのカリフは、1517年に、オスマン朝によるエジプト征服によって終わる。

政治活動におけるウマイヤ朝とアッバース朝の明らかな違い

ウマイヤ朝の時代は征服活動に尽きた。アラブ人は、ヨーロッパにおいて前進しつづけ、フランスにまでも攻撃を仕掛けた。この時代において国境は非常に広がった。アッバース朝においては、征服活動はあまりなされず、現状の国境を維持する事に努めた。アッバース朝は学問と文芸を発達させた。文明を発達させたのだ。

ウマイヤ朝では、イスラム政権による完全な組織はなかった。アッバース朝においては大臣によって運営される組織が作られていた。カリフが決め、大臣が運営するという責任分担だった。

ウマイヤ朝の時代にあった大きな州は、アッバース朝の時代、政治を簡略化するために、小さな州に分割された。

ウマイヤ朝は、完全なアラブによる政治を追求し、一族に重役を与えた。全ての政権は兵士と司令官に身内を任命していた。ウマイヤ朝は、ムスリムも優遇していた。他の民衆はムスリムの奴隷として捉えていた。ウマイヤ朝は、トルコ系民族に対しても同じような待遇をした。ウマイヤ朝が求めたこの政治体制は、トルコ系民族を、彼らの統治に対する敵と戦わせるために支配下においた。

クテイベ・ビン・ムスリムがホラサン総督であったことでトルコ-ウマイヤ間の対立が激しくなった。マーワラーシナフル地方に入ったアラブ人は、トルコ民族の都市を征服し、焼き払った。トルコ民族は虐殺された。この状態は、アッバース朝の時代まで続いた。ウマイヤ朝による、トルコ民族に対する行動は、かれらのイスラム化を遅らせた。

アッバース朝は、国家がアラブ人だけのものであるという考えの殻を割り、トルコ民族の優秀性を買って1つのムスリム政権を建設した。トルコ民族は、軍隊の司令官、財政、行政の責任者として採用していった。アヴァスム州の総督もトルコ民族が任命された。アッバース朝は、トルコ民族の間にイスラム教を浸透させ、カラハン朝、オグズ族と多くのトルコ系民族にもイスラム教を広めた。

ウマイヤ朝の最期、アッバスは息子達と共に紛争に対応していただけだった。実際、ウマイヤ朝のカリフ統治はアッバスの家系で終わってしまった。

3．イスラム文明の基礎

今日のムスリムとして知られているどの国でも、イスラム教を受け入れる以前にもそれぞれの文化を所有していた。ムスリムとなっても、それらの文化は完全に放棄していなかった。イスラム教を受け入れた全ての社会は、それ以前の蓄積された知識と文化とイスラム文化の要素を、同時に発展させた。

4．イスラム文明構築における他文明の影響

ムスリムは短期間のうちに征服した土地に元々住んでいた人々と、元々存在した文明を利用して自らコミットしながら、独特のイスラム文化と学問を発展させた。このように、世界の文明を発展させることに貢献した。学問と思想も発展させ、ムスリムはトルコ、古代ギリシャ、インド、イランそしてその他の文明を利用した。

古代ギリシャの影響

ムスリムは聖ウマルの時代において、古代ギリシャ文明に興味を持ち、その文明圏を征服していった。ウルファ、ハッラン、アンタクヤ、そしてアレクサンドリアのような都市で、文書の基礎は、ハールーンアッラシードの時代にバグダッドにおいて集結された。アッバース朝のカリフメンヌンは、ビザンツ帝国に対して、ギリシャ文書が欲しかったので使者を派遣している。手に入れた文書からは、ユークリッドの作品も見られた。これらの結果、イスラム史における翻訳時代と呼ばれる時代が始まった。しかしながら、初期になされた翻訳は、全てギリシャ語からではなく、シリア語からだった。このように、シリア語が古代ギリシャ文明をアラビア語に訳すために作られたのだった。古代ギリシャ文明がイスラム文明に与えた影響をカリフメンヌンの時代(813~833)にはもっとも多く確認される。メンヌンは、バグダッドに知恵の家と呼ばれる建物を作った。この建物には図書館、研究と翻訳のオフィスがあった。ここは、紀元前3世紀に立てられたアレクサンドリア博物館以後の文化史に関する最も重要な文化財とされている。このように始められた翻訳作業は、100年間は続けられた。アラビア語に似たいくつかのギリシャ語は、この時代に外来語としてアラビア語となった。

古代インドの影響

インド文明による、イスラム学問への影響は古くから、数学と哲学といった学問に及んでいた。インド人からの旅行者はイスラムへ哲学について書かれた書物を持ち込んだ。カリフマンスールの命令で、これらの本はアラビア語に翻訳された。この基礎に大きく貢献したムハンマド・ビン・イブラヒム・アル・フェザールは、イスラム世界の最初の哲学者として知られている。メシュフルはイスラム学問をアルハレズミー、哲学の水路をアルフェザリーに、この基礎構築を任せた。先の旅行者は、数学に関する文書をバグダッドにも持ち込んでいる。この文書によってインドの数字、数学の知識が輸入された。さらに、10進法もインドから紹介された。

イランの影響

イランの影響によって、イスラム文明における文芸と芸術は非常によく発達した。イラン

の翻訳家によってアラビア語に訳された最初の作品は、ビドパイの『カリーラとディムナ』だった。この作品に登場する動物たちはイスラムの王子の教育に使用され、ほかの人々の間でも流行した。カリフアルマンスールは、イランから一人の医者を召喚している。この医者は、カリフ専属の医者として働いた。

5 . イスラム文明

イスラム文明は、イスラム教を受け入れた全ての民族の歴史が混合した文明である。ここでは、アッバース朝が建設されてから崩壊するまでの間に発達した、イスラム文明について詳しく説明したい。

a) 政府の方向性

ヒジュラのすぐ後、設立されたメディナ政権の指導者は聖ムハンマドであった。聖ムハンマドは、ただ単にイスラム教の預言者にあらず、当時最強と謳われた軍、行政、財政を作り上げた人物であった。この他に、彼の口から出た全ての法律と行動も、宗教を確立させていったのである。聖ムハンマドの時代、政府の宗教と世の中における義務を混合して自らのものにした。

聖ムハンマドの死後、彼の義務を受け継いだ聖アブー・バクルは、カリフとして政府の筆頭者として選ばれた。聖アブー・バクルは、聖ムハンマドの預言者としての義務以外に全ての法的権限を得ようとした。イスラム政権の筆頭者を意味するカリフがどのように選出されるべきなのかは、コーランあるいは口伝にも記録されていなかった。ゆえにカリフは、ウマイヤ朝が建設されるまでは、選挙あるいは遺言状に基づいて選ばれていた。ウマイヤ朝の時代では、世襲制によってカリフが選ばれていた。この制度はアッバース朝でも採用されている。カリフは、宗教を支配する権限は持たなかった。

聖ムハンマドは、イスラム教の布教と、コーランを読み上げること、そして義援金を集めるために、何人かの責任者を選んだ。彼らは、派遣された土地において、法律に関する問題を解決した。聖アブー・バクルも同じ方法を用いた。

聖ウマルの時代、イスラム政権は拡大しながら新しい問題を抱えていた。新たな必要性として、新しいポストと指導者が不可欠だった。そしてまずは、総督というポストが作られた。総督たちは、最初は、征服した土地に駐屯する軍隊の司令官だった。総督たちは、赴任した土地において、カリフの命令の他に別の法的権限を持っていた。

聖ウマルの時代まではカリフたちは、訴訟に対してはイスラム法官を任命していた。

イスラム政権では、聖ウマルの時代までは宝蔵がなかった。大征服政権になると、宝蔵の建設が必要となった。そして聖ウマルは、イスラム政権における最初の宝蔵、ベイテュールマールを建設し、その責任者として宝蔵官と呼ばれるポストを作った。同じように、整然とした軍隊と軍隊の記録係として軍の枢密院も聖ウマルの時代に作られた。

ウマイヤ朝の時代は国土が拡大し、ポストの数も指導者の数も増えた。そしてカリフの保護者という意味を持つハラスールカリフが、文書を管理する事務所ディヴァーニユル-ハー

テムが、財政に関する職務を行うディヴァーニユル-ハラジが、治安を改善するためにシュルタという組織が建設された。

さらに、政府の高官とカリフの相談役と、家庭教師役としてベリッド(ポスタ)という組織もウマイヤ朝の時代に設けられた。

アッバース朝のカリフは、職務に時間を割くことができなかつたときのために、新しいポストを作った。大臣というポストだ。統治するための仕事が増え、高官の数も増えていた。様々なポストが作られた。

b)宗教と信仰

イスラム政権における宗教は、イスラム教である。イスラム教は、ムスリムの信仰システムから、彼らの政治、社会、法律を形成した。イスラム法の基礎としてコーランと聖ムハンマドの言葉が利用されている。解決すべき問題がおきた場合は、クヤースとイジュマという方法が用いられて解決された。様々な社会と民族のイスラム教の異なる解釈と利用がなされていたウマイヤ朝では宗派が生まれ、アッバース朝においても宗派が増えた。このように、様々な宗派が生まれた。

イスラム教は、偶像崇拜主義を禁止した。しかし、エフリーの書からはそれらのいくつかの条件とともに彼らの宗教と信仰を続けることを許可している。この適応を始めた、聖ムハンマドはユダヤ人と共存しようとした。その後もキリスト教徒とユダヤ教徒は元々の宗教と信仰を行った。

c)社会と経済

社会

イスラム政権において4つの社会集団があった。これらの1つカリフ一族の筆頭者を担っていた人々とアラブ諸族だった。第二に、メヴァーリと呼ばれたアラブでない全ての民族のうちムスリム化した人々。他は、ジンミーと奴隷である。

イスラム教によると全てのムスリムは差別がないということにもかかわらず、ウマイヤ朝の時代では、アラブ人は、自分たちをアラブでない民族から卓越した存在であるという認識を持っていた。しかし、カリフ、ウマル・ビン・アブデュッラージズの時代にイスラム教の原理に反するこの適応は放棄された。

イスラム教を新たに受け入れたアラブでない社会は自らが「マワーリー」(奴隷)と呼ばれることを当然良くは思っていなかった。さらに、アッバース朝初期においてこういった民族の数はアラブ人の数を上回った。アラブ的でない学問と思想の人々は、レベルの高い文化をもってアラブよりも高等であることを宣言した。この宣言を証拠立てるために様々な文書が書かれた。イスラム史においてシュービエ運動と呼ばれるこの運動は、イスラム社会を形成していた様々な民族の文化について独特の文書を公表し、理由付けた。この時代、トルコ民族の特徴を記したトルコ民族の優れた特徴という文書が書かれているこの文書において、トルコ民族は、他の民族と共に混合した優れた民族であることが紹介され

ている。

イスラム政権下において暮らしていたキリスト教徒とユダヤ教徒は、イスラム教が国教であることから、ジンミー(異教徒)と呼ばれた。当時領土は拡大していきベルベル人とメジューシ人もこの集団の 1 つとして数えられていた。かれらは政府にジズヤと呼ばれる税金を納めていた。ジンミーが収めたジズヤは、経済状況により変化した。彼らは自分たちの宗教法を使用していた。イスラム法は彼らに適応されなかった。

奴隷制は、イスラム以前から存在した。イスラム教は、奴隷制を禁止しているがムスリムが自らと同じ宗教の奴隷を持つことを禁止していた。奴隷の人生は条件付で整理され、奴隷を解放することは、良い行いであるとされた。

経済

イスラム政権における経済は商業、産業、農業と酪農によって形成されていた。アラブ人は、イスラム以前も商業に深くかかわっていた。イスラム政権の国境が拡大すると商業も拡大し、重要となった。初期では、キリスト教徒、ユダヤ教徒とメジューシ人と商業を行っていた。しかし時と共にムスリムは、彼らの土地を奪った。バグダッド、バスラ、カヒーレ、アレクサンドリアのような都市が陸と海の貿易の中心となった。ムスリムの商隊は、中国まで進出した。西はモロッコ、スペインまで前進した。北はハザル国、イティル川までひろがるブルガール国まで行ったムスリムの商隊は、陸の貿易で重要な役割を担っていた。ムスリムの商隊は、ナツメヤシ、砂糖、絹、毛糸の生地、ガラス細工、香辛料、象牙、木材、皮製品、黒人奴隷などを輸出した。

産業は、イスラム政権の様々な地方で大変発展した。西アジアにおける都市で、絨毯、キリム、絹、絹生地、毛糸生地の工場があった。さらに、石鹼、絨毯、灯油ランプ、毛皮、りゅうぜん香、蜂蜜、ナイフ、サーベル、矢、弓、机、楼台、花瓶、合金の扉、ガラス細工などが作られていた。

8 世紀半ば、中国からサマルカンドへ伝わった紙の製法は非常に重要である。その当時、バグダッドで紙の工場が作られた。その後、他の都市においても紙の工場は作られた。

イスラムの国では真珠、ルビー、エメラルド、ダイヤモンド、メノウのような宝石の商業化され、これらの商業は成金を生み出した。

イスラム政権は、農業を発展させる対策を手にした。そして、ニル、ユーフラテス、ディジュレ、セイフン、そしてジェイフ川の側に野菜市場を建設した。そこでは、野菜、果物、花などが十分にあった。インドあるいはマレーシア原産であるオレンジは、西アジア、地中海、スペイン、そしてヨーロッパに広まった。美しい香りのする花と、それらから抽出される香水は、非常に価値のあるものとされた。

農業以外に、人々にとって最も大切だったのが家畜である。家畜は、肉、皮、毛皮の原料となった。アラビア半島のラクダと馬は、：イランにおけるヤギとラクダ：トルキスタンにおけるラクダ、羊、牛、馬はとても有名だった。

イスラム政権における財源は、ザカート(義援金)、ガーニメット、ハラージュとジズヤで

あった。

ザカートは、裕福なムスリムが喜捨するという意味で用いられている。戦争において手にしたガーニメットの 20%は、政府の金として消えた。ハラージュは、土地の所有者に課せられる税金である。ジズヤは、ムスリム以外の民族に課せられるものである。さらに、商売、鉱山、塩、港、牧場などからも財源となる様々な税が取られた。

ウマイヤ朝のカリフ、アブドゥルマルクの時代、最初のイスラム硬貨を作った(シッケ)。それまでは一般的に、ビザンツとイランが硬貨を作っていた。

c)言語と文芸

イスラム政権において、アブドゥルマルクの時代まで、一般的に公務では様々な言語と文書が使用されていた。アラビア半島ではアラビア文字、エジプトとシリアではギリシャ文字、イランとイラクではパフレヴィー文字が使われていた。シュリヤーニーは独特の文字を使用していた。アブドゥルマルクは、公式の文書ではアラビア文字を使うことを命じ、アラビア文字を使うことを広めた。イスラム教を受け入れたアラブ以外の民族もコーランを読むためにアラビア文字を学び始めた。

言語

セム諸語の 1 つであるアラビア語は、イスラム以前からアラビア半島で使用されていた。しかしながら、征服が広まると共にアラビア語は広まっていった。新たに征服された国で暮らしていた民族も、次第にアラビア語を話すようになりアラビア文字を使用し始めたのである。

全てのアラビア学者はまずアラビア語を学び始めた。作品をアラビア語で記し、それはアラビア語が広まることに貢献した。大辞書も作られた。アラビア語辞書の申し分のない三つの辞書の 1 つとして認められている、Silah の著者はジェヴヘリーというトルコ人である。このようにとても多くのトルコ人学者が、アラビア語の文法書と辞書を製作した。

文芸

イスラム以前、アラビア半島では文書による作品はなかった。しかしながら、口述伝承による詩が非常に発展した。

聖ムハンマドと友人の生活と戦いを、新たな世代に伝えるために文芸が始まった。この作業はイスラム史においてイスラム研究の起源となった。コーラン、ハディース、テフスィール(コーランの解釈)としてまずは、アラブ史、アラビア言語、そして文芸の作業が始まった。

アラブ人の間では昔から演説、すばらしい話し方と詩のような言語芸術があり、ウマイヤ朝の時代においてそれは非常に発達した。無学時代の詩はこの時期に集約された。

アッパース朝の時代はギリシャ語、フランス語、インド語その他、という言語がアラビア語に多く訳された。こうして、重要な文書がアラビア語に訳されていった。その後、アラビア語による作品が世の中に多く排出されていった。

d) 学問と芸術

イスラム政権の初期、ムスリムたちは国内外における戦闘によって、生活と経済の形を変化させ、学問と芸術を発展させていった。イラン、シリア、エジプト、ベルベル、トルコがイスラム社会に加わり、互いに歩み寄っていった。その後、すでにムスリム化していた諸族は、影を薄くしていった。そして、イスラム政権における学問と芸術は、全ての民族が加わったものとなり、1つの民族によって所有されるものではなくなった。

優先してコーランを読み、明らかにしていく必要性は、言語学と辞書が製作される原因となった。この結果ハディース学が生まれた。アル・ブハール(870 死)は最も有名なハディース学者である。彼はハディースを、1つの本に集約した。

ムスリムは言語、法律、神学、哲学に関する独特の研究をし、思想を追求した。この結果、医学、化学、哲学、数学、地理学、歴史学のような学問が自然と発展していったのである。

歴史学者は、歴史的な事件をありのままに記すことを重要視した。著名な歴史学者としてタバリー、イブンユレシル、そしてイブンハルドゥーンがあげられる。地理学においても、とても有名な地理学者、探検家、文書がある。地理学の書物と探検家による記録書が書かれた。探検家であるイブンバトゥータの有名な旅行は、その時代、そして現代においてもとても重要な書物となっている。医学の分野ではトルコ民族出身の学者、イブンシーナーの『医学の法』という書物が12世紀から17世紀に渡り、ヨーロッパでは医学の基本書として使用されていた。

哲学、数学の分野ではアルフェザーリーに始まり、フセインビンイスハック、サビットピンクラー(901 年死)、アルバターニー、トルコ民族ではアルビルーニー(1050 年死)とアルハレズミー(850 年死)があげられる。

化学の分野では、ジャビルビンハッヤーンとアルラージーが重要な研究成果を残している。アルラージー『神秘の書』はラテン語に翻訳されている。

哲学の分野では、トルコ民族であるファラービー(950 年死)とイブンシーナーが重要な書物を記している。

イスラム芸術の素晴らしい書物は、ローマ、ビザンツ、ササン朝、そしてエジプト芸術に影響を与えた。これらの書物はエジプトのアムルビンアルアースジャミィとカイヴァンジャミィにて、現在も見ることができる。ウマイヤ朝は、ジャミィにミフラーブとミナーレを建設した。ウマイヤ朝の時代に建てられたもので現存しているのは、アブドゥルマルクビンメルヴァンによって建てられたクッベテュスサフラとアクサージャミィ、そしてシヤムのユメツイエージャミィである。これらはアラベスクと呼ばれる装飾がなされている。文民の建築家、クサイラムラは宮殿にあるような人間と動物の絵を描いた。

アッバース朝に、素晴らしい芸術の前進が記録されている。ウマイヤ朝の時代に作られた都市を、アッバース朝は作り直し(バグダッド、サマッラー)、これらの都市を記念碑的なものとした。建築物の中の装飾には、幾何学模様、アラベスクが利用された。

6. イスラム文明による他の文明への影響

イスラム文明は多くの地方へ影響を与えた。そして、その影響はヨーロッパにおいて最も顕著に見られる。

ヨーロッパ人は、スペインが占領された後、イスラム文化が非常に発達する土地となっていた。イスラム政権下のスペインは、本来のイスラムの国々であったかのように、高等な文化が発達した。同じように12世紀、後ウマイヤ朝における高等なイスラム文化は、スペインからヨーロッパへと知られるようになっていった。スペインにおけるトレダとシチリア島は、学問と文化の中心地となった。ここでは、人類共通の文化と文明が評価した基本的な知である多くの書物が、アラビア語からラテン語へ翻訳され、ヨーロッパに広まっていった。後ウマイヤ朝においてイスラム学問を学んだヨーロッパ人の学生は、母国へその知識を持ち帰った。このように、医学、数学、哲学、歴史学、化学のような分野の知識がヨーロッパへと持ち込まれた。十字軍遠征も東と西が、互いをもっと近いものであるということが知られるようになった。

このように、イスラム文明は、ヨーロッパの発展に大きく影響したのである。15世紀と16世紀には、ヨーロッパで始まったルネサンス運動の下準備となった。ルネサンス運動はヨーロッパ文明の環境をも改善した。

問

- 1、イスラム以前のアラビア半島における政治状態はいかなるものであったか。
- 2、ヒジュラの重要性を明らかにせよ。
- 3、聖ムハンマドが行った戦いの原因と結果を明らかにせよ。
- 4、フダイビヤの盟約の重要性を明らかにせよ
- 5、聖アブー・バクルの時代における重要事件を明らかにせよ。
- 6、政治手法に関して、ウマイヤ朝とアッバース朝の違いを明らかにせよ。

テスト問題

1. 下に挙げた語句の中から、イスラム以前のアラビア半島で建設された政府でないものを一つ挙げよ。

- a)Himyeri b)Nabati c)Sebe d)Urartu e)Mina

2. 最初のイスラム政権の基本的な事件のうち最後に起きた事件をあげよ。

- a)ウフドの戦い b)フナインの戦い c)ヒジュラ d)ハンダクの戦い
e)ベディルの戦い

3 . ヨーロッパにおけるイスラムの前進において、アフリカとスペインで混乱が起きたが、下に挙げた中からそれらで最後に起こったものは何か。

- a) プヴァットイエの戦い
- b) エジュナディンの戦い
- c) 橋の戦い
- d) カディシエの戦い